立教大学ジェンダーフォーラム主催　第 73 回ジェンダーセッション

「性風俗で働く人々と“女性自立支援”」

日　　時：　2017 年 12 月 11 日（月）　18:30～20:30
講　　師：　要友紀子氏（SWASH 代表）
会　　場：　池袋キャンパス 11 号館 2 階 A203 教室

第 73 回ジェンダーセッションでは、「セックスワーカー」の安全と健康のために活動するグループである SWASH（Sex Work And Sexual Health）メンバーとして、これまで、風俗嬢意識調査や、「セックスワーカー」向けに HIV/STD 予防のための講習会やパンフレットの配布、近年では、日本で働く外国人「セックスワーカー」の調査とアウトリーチを行ない、移住労働の「セックスワーカー」の抱える問題にも取り組んできた要友紀子さんを講師にむかえました。風俗産業の是非や売買春をめぐって、フェミニズムやジェンダー研究のあいだにはさまざまな意見があり、研究者や運動家のあいだにも、広く国際社会にも、「合法化」「犯罪化」「非犯罪化」というように、性風俗産業をとらえる立場は複数あります。性や性産業の問題は、当該の経済や社会のあり方、私たちの人権や生存に深くかかわっています。それだけに、さまざまな文脈で議論がなされ、多様な課題を喚起するテーマとなっています。講演では、支援活動を通じて明らかとなった性風俗で働く人々を取り巻く状況と問題点、課題をお話いただきました。

日本では性風俗で働く人々を「救済」の対象として捉えがちですが、様々な事情により性風俗での仕事を選択している人々のニーズや、人権がないがしろにされている性労働の現状を知ることができました。女性の様々な生きづらさや困難を捉え、「自立」や「社会復帰」を支援することも大切ですが、同時に性風俗で働く人々の個々の選択や自らが抱える問題への対処の仕方の多様性も尊重される必要性が提起されました。質疑応答では、性風俗で働く人々へのスティグマを拭う方法や、当事者の声を社会に届けることの重要性、セクシュアリティやジェンダーと私たちの日常生活の結びつきなどが議論されました。

アンケートでは「性風俗で働く人々への見方が変わった」等、新しい視点が得られたとの感想が多くありました。また、学生を含む若い世代の参加が比較的多かったようにも見受けられました。このことから、一面的および「特殊な人々の問題」としてしか捉えられることのなかった性風俗の問題や課題を、大学という場で、要さんご自身の経験と理論を踏まえた様々な角度から提示していただいたことの意義は大きいと考えます。ありがとうございました。

（立教大学ジェンダーフォーラム事務局　土野瑞穂・中村雪子）

講演中の要氏